

これからのお寺を考える情報誌

# みくら

## 寺業再興

Vol

7

2015

お寺の守るべきところ、変わるべきところ



特集

社団法人 x 企業法人が考えるこれからのお寺とは

グリーンとともに生きていく  
一般社団法人リヴオン 代表理事 尾角光美

みんなが集まるお寺をつくる  
一級建築士事務所UA 代表取締役 押尾章治

葬儀やお墓をケアする安心のシステム  
一般社団法人全国相続支援協会 理事長 茂木高次

## 寺業再興 お寺の守るべきところ、変わるべきところ

### 特集

社団法人 × 企業法人が考えるこれからのお寺とは

目次 page

**グリーフとともに生きていく** | 01

一般社団法人リヴオン 代表理事 尾角光美 | 5

06

**みんなが集まるお寺をつくる** | 07

一級建築士事務所UA 代表取締役 押尾章治 | 5

11

**葬儀やお墓をケアする安心のシステム** | 12

一般社団法人全国相続支援協会 理事長 茂木高次 | 5

15

インタビュー1

尾角光美

リヴオン代表理事

# グリーフとともに生きていく

親しい人を亡くせば、誰しもが深い悲しみ（グリーフ）にとらわれる。

しかし、その際取る行動や反応は人それぞれであり、取るべき対応の仕方もまたさまざまだ。

グリーフサポートをテーマに活動を続ける一般社団法人リヴオンの代表理事の尾角光美氏に、

グリーフとは何なのか、グリーフケアの現場では何が大事なのかについてお話をうかがうとともに、

つねにグリーフの傍にいる僧侶の役割などについても語っていただいた。

グリーフとは

——まずグリーフをどのようなようにとらえられているのかをうかがえますか。

日本語訳では、悲しみ、嘆き、悲嘆ということ、悲しみという表現が前面にきますが、グリーフケアの定義の中では、グリーフというのは喪失から生まれてくる反応や感情やプロセスなんです。悲しみだけではなくて、怒りや不安、恐怖やさみしさ、後悔などもあります。そういった感情のほか、身体的な反応も起きてくるので、グリーフケアでは身体のケアについても伝えます。

グリーフの反応は誰かを亡くした後すぐに起きる人もいれば、何年か経って命日が近づいた時に急に襲ってくるという人もいます。死や、なにかを失うというのは一瞬の出来事で、たとえば、震災が起きたのは2011年3月11日の14時46分であったり、津波が襲ってきた時刻で「点」のようなものですが、グリーフというのは

プロセスであり続いていく「線」なんです。もちろんとぎれとぎれになることもあると思いますが、いろんな感情や身体的症状、さらに社会的な影響も生まれてきます。

失うということは、それまで信じていた世界そのものを失うのに近くて、昨日までいたお父さんが今日はいないというように、あたり前にあった日常を失うと、人との関係が怖くなった、自分自身のかかえているものを出すことに対するハードルが上がったりするので、人との距離感に影響することもありますね。

「ままだ」受け取る

「ままだ」という言葉を大事にしています。「ありのままに」、「感じるままだ」の「ままだ」。いかなる感情、反応も必要があって生まれてきているものなので、グリーフケアではそれをまでするまま認めることが重要です。私たちはつい、

落ち込んでいる人がいたら落ち込んでいない状態にしようとしてしまいますが、落ち込んでいるというその状態、その人が感じていることをまずそのまま一緒に味わう。

たとえば、震災の翌月に被災地へ行った際「妻を殺しました」と言う旦那さんがいて、一生懸命に行方不明の奥さんを探していたんですね。この方に対して「あなたは悪くないですよ。津波にさらわれたんじゃないですか」と言って慰めようとするかもしれないですが、その言葉は届かない。「殺したと思っっているんですね」とまずそのままの気持ちを聴いていくことでもっと奥にある思いを聞けるかもしれません。何も言わずただ黙って聞いていた時に「わたしが仕事に行かずにそばにいたら助けられた、そばにいて助けたかった」と話をしてくれて、そういう願いとか思いが自責感や罪悪感の根っこにあるのがわかった。自分を責めている人に「あ



尾角光美（おかくてるみ） 1983年大阪府生まれ。一般社団法人リブオン代表理事。自殺予防や自死遺族のケアに関する講演や僧侶を対象とした研修、さらに中学生から大学生を対象とした「いのちの授業」を行っている。

「あなたは悪くないよ」と言うことで事を収めようとしてしまいますが、それでは収まらないんですね。その人にはそれだけの罪悪感を抱くだけの深い願いとか思いとかがあるので、そこをきちんとそのまま聞いていくこと。

—— 思いをまず受け止める。

受け止めるというと「止める」感じですけど、まずはそのまま受け取る感じ。そのままに受け取っていくと、出てくる思いがあるんです。

たとえば母親を亡くした人がいたら、たいていの人は「お母さんが天国から見守っているわよ」とか「あなたの心の中にいるから」とつい言ってしまう。こうしたことは喪失のいたる現場で起きていて、もちろん思いやりや善意から発せられているのだけれども、本人の実感からは遠い。「もう落ち着いた？」と言うのも一緒に、「落ち着くわけじゃないじゃない」と思いながら、心配

させてはいけないという思いで「大丈夫よ」って言わなくてはいけなくなる。そうするとグリーフはどんどん隠されていくわけですが、この隠されたグリーフというのがしんどいですね。

### 個別性と関係性を重視

「個別性」というのがグリーフの一番重要なキーワードのひとつになります。百か日を卒業（そつこくき）とって、泣くのをやめる時という意味ですが、泣きやめない人もいるわけですね。あるいは百日経ったからこそ泣けるという人もいます。震災から2年経ても一度も泣いていないという方もいて、実にさまざまな反応があります。人それぞれであるということを中心理解しておく必要があります。

それと大事なことは、どんな関係性を築くか。どれだけの信頼関係を築けるか。信頼関係がある中であれば、お坊さんが、「死にたい」と言った人に通常では言っではいけないとされる「頑張れ」って言って、励まされたという人もいますかも知れない。一方で、そう言われて、「なんでそんなことを言われなきゃいけないんだ」と思う人もいます。鬱病の人に頑張れと言っではいけないとよく言われますが、それもどうかかわらないですよ。本当に信頼関係ができていて「君なら本当にできる力があると思うから頑張れよ、俺応援しているから」って言われて、奮い立たされる人もいます。だから言葉ではなくて、まずは信頼と関係性が大事なんだと思

うんですね。

—— 受け取る側も知識がないと難しそうですね。そうですね、知っていると、このような反応はおかしくないなって思える。たとえば、十数年経ってから、いきなり、あるきっかけで悲しみがやってきた時に、何も知らなければおかしいと思ってしまう。でも知識があつて、何年経つても、グリーフの反応が起き得るということがわかっていると「それもひとつの自然の反応としてあるんだよね」って共有できますよね。

私がグリーフケアで重要視しているのは、情報提供なんです。グリーフについて知らないから、グリーフを抱えている人は苦しいんだと思うんです。おかしくなってしまうんじゃないか、自分だけがこんなふうになっているんじゃないかしらと。でも、そうした反応は自然なものなんです。とお伝えすることが大事で、後はそれに対してどう対処していくのかという方法と知恵を分かち合っていくことだと思っんですね。

### つながることの大事さ

先ほど「ままに」のお話をしましたが、もうひとつ、亡くした人と繋がるといふこともとても大事で、死が終わらだという考え方がありますが、私は死がはじまりだというところから、考え方をすごく大切にしている、亡くなった人ともう一度つながることができる、もう一度関係を紡ぎ直していくんだと。その方法は、人によってはお墓参りかもしれないし、亡くなった母親

に手紙を書くことかもしれない、また人によっては法事のときに亡くなった人が好きだった花を毎年大切に飾ることかもしれない。いわゆる仏花ではなくて、ひまわりが好きなお母さんだったら、葬儀や法事にひまわりを飾ることも亡くなった人とのつながりを大事にするということだと思っただけです。

私たちは失ったことを大切にすることを学ぶ機会を逸して、どんどん無くなっていると思っただけです。葬儀を簡素化してすまそうとするケースが増えているようですが、手間暇をかける中に、本来は亡くなった人とのつながりを感じる時間があつたんですね。

葬儀というのは、亡くなった人を送る側の問題でもあるわけです。葬儀は最たるグリーフワークで、あれほど自分がグリーフを大事にできる時間はないと思っただけです。私は母と兄を亡くして、兄を2年ちよつと前に亡くした時には僧侶の友人たちが傍にいてくれて、葬儀屋さんもグリーフケアに詳しい仲間がいて、もうみんな葬儀をつくるという感じでした。そういうなかで、葬儀が自分自身にとって、本当にケアになったという経験があります。

### 死は終わりではなく、はじまり

死が終わりだというのは希望がないように感じます。死がはじまりだととらえることによって希望を見いだすスタートラインに立てると思っただけです。往生という言葉がすごいと思っただけです。

「往って生まれる」と書く。往生したねって言った時、生まれているという感じはしなくても、浄土のほうでは命が生まれている。新たな命が生まれ、その死者の命とこちらの私の命がまた繋がりを築いていくプロセスがグリーフワークだと思っただけですが、そういう風に考えられるのは日本人だからこそなんですね。欧米ではそういう考え方はないので、死者が生まれているという考え方は遺族や遺された人たちにとって大きな希望のあることなんだと思っただけです。亡くなったあとにたくさん気づくことがあつて、「ああ、お母さんがつくってくれたあの卵焼きの味を再現したい」とか、そんなことは生きている間は考えないけれども、そうして死者たちの残していったものひとつひとつを大切にしているうちに、豊かな生き方があるというか。

### 物語を紡ぎ直す

——グリーフケアの現場では、今話されたような、卵焼きをつくってくれたとか、そういうところで亡くなった人との物語を再構築していくという話はしているのでしょうか。

ええ、物語を再構築するという言い方をグリーフケアの中ではしますが、私はそういう堅い言葉はあまり好みではないので「物語を紡ぎ直していく」と言っています。私は、母がうつ病を患っていたので、実は幼少期から関係が悪かったんです。自分の存在を否定され続けたので、母親への憎しみに近い感情が亡くなった後も簡単に

は消えなかつたんですね。

地元は元々関西で、一家で東京に越してきたんですが、ある時、おにぎりを俵形にしか結ぶことしかできなかった母親に、みんな三角だよって、おむすびを三角に結んでほしいって言って喧嘩したことがあるんです。でも亡くなった後に、おむすびを見て、なんかあの時の俵形って良かったなと思えるわけですね。そうやって母親がかけてくれた愛情とか、生きていた間は感じきれなかったものをもう一度感じることによつて、もう一度感謝をしたり、自分自身の存在が今ここにある理由を辿ったりすることが、母親との関係を見つめ直し、他者との分かち合いの中で物語ることによつてできてきたのかなど。

——でも、それによつてグリーフを乗り越える、ということではないんですね。

グリーフと一緒に生きていく。死とか喪失を乗り越える、立ち直るといふと、グリーフが無くなる感じがしますが、ずっとあるんですね。声をかけてくるわけですよ、寂しいよおとか。

——ここまでくれば大丈夫という話ではないのですね、記憶や過去は消えるものではないし……。そうなんです。もちろん記憶が薄れていくということがあるとは思いますが完全に消えることはない。私はグリーフスイッチ、悲しみのスイッチと表現するんですが、なにかの折りにひょいっとなら顔を出してやって来る。だからつねに近くにはいたりするものなので、じゃあそれと共にどう生きていくかということを支える

ことが一番重要なんです。そこで、グリーンと共に生きていくために物語るというのは、とても大きな支えになるんだと思います。

### 自分の苦悩と向き合う

僧侶から、自死遺族や幼いお子さんを亡くされたご遺族に何と言葉をかけていいかわからないという相談をよく受けるんですが、言葉が出ないなら、言葉が出ないということを、やはり自分の中で味わうのが大切だと思います。なぜ言葉が出てこないのか、傷つけるんじゃないのかという怖さがあるからなのか。もしそうなら、そこに向き合わない限り、本当に真実の言葉で法話を語ることや遺族に向き合うことはできないと思うので、自分に向き合っていたり、その重要性を僧侶の研修会や講座でもお伝えしています。声かけができないということは、遺族にかける言葉を知らないからではなくて、その自分の心に何かが起きているからなので。でも、それなりの数の方が自分の苦悩と向き合ったことがないと言っています。これには最初驚きました。今では、最終的に根本の僧侶教育が変わるぐらい、リヴオンとしても頑張っているのかなといけないかと、思うようになりました。僧侶を対象とした連続講座の中では、自分と向き合う深さがかなり深いので、そこでやっぱり僧侶たちから聞こえてくるのは「自分の苦悩に向き合ってこなかった」とか「こんなに人の苦悩に向き合う怖さを抱えていたんだ」と気づくよ

うです。

——まずはサポートする人をサポートする必要があると。

そうですね。支援者支援という言葉ケアのフィールドでは使うのかもしれませんが、本当にそれが重要で、僧侶はたくさん遺族に出会っている。だから僧侶一人サポートができるとなると、それだけ多くのご遺族の力になれるわけです。

——そこで型どおりの話をして誰も救われないので、個性が重要になるわけですね。

そうですね。たとえば浄土系の宗派であれば、葬儀で「お浄土に生まれたのもう心配する必要はありませんよ」と言葉にされることがあるかもしれないですが、お父さんを早くに亡くした私の友人が、「なんか浄土行つて万歳つていう法話されてさ、すごい嫌だったんだよね」って言うっていて、それはそうなんだと思うんです。信仰もなければ僧侶との関係性もない中で、どこに行つたという実感を持ってないし、「浄土って浄土宗の幼稚園で浄土について小さい時から聞いて知っていれば、ああ、あそこに行つたんだって思える。でも、浄土なんて聞いたこともない遺族に「お浄土に行つてますからご安心を」と言っても、それは本当に届くのでしょうか。だから、やはり、それぞれの個性を見極めた上で関係性を築くということが必要になります。日頃はほとんど面識もなく、葬儀からのお付き合いというのが最近増えていると思うのですが、

そうだとすると、戒名を付ける段で話を聞いて、亡くなられた方がどんな生き方をされたのかとか、どんな人だったのか、その命をしつかり聴いた上で、その葬儀に臨めば、違ってくると思うんです。

### 相手を知らなければ伝わらない

僧侶は死というものにどうしても慣れてしまうけれども、では目の前の遺族が苦しんでいる時に何もしなくていいのかと。その遺族に対してできることを考えるというのは大事ですが、もちろん全家庭、全檀家さんにそれをする必要はないと思います。相手のニーズも考慮しなければいけないし、お坊さんなんかそんなことをしてもらわなくなつていいと思つている方の中にはいらつしやる。でも誰にでも起こりうる死別後の反応についてなど最低限必要な情報提供をしたり、そこに意識を持っていますという旗を掲げるといふことを見せない限りは「お坊さんは遺族のことを考えてくれているんだ」ということが一般の人たちに伝わらない。僧侶が話を聞いてくれる存在だとは思っていないし、どちらかという遺族の側が僧侶からありがたいお話を聞くという感じですよ。そのお話が本当にありがたいお話になるかどうか。本当に有り難い話というのは、こちらのことを本当に思つて話してくれる話なんです。伝えているけど伝わっていないことはたくさんあって、本当に「伝える力」をまず身につけること。そのためには



2014年出版の書籍(サンマーク出版)。  
他に、『101年目の母の日〜今、伝えたい想い〜』なども出版。

相手を知ることなんですよね。相手を知らなければ、何を伝えることがよいのかもわからず、相手に伝わるようには話せないのです。

遺族のケアをもし学びたかったら、どんなに著名な専門家が書かれた本を読むよりも遺族の話を聴かせていただくことが一番大切な学びなんだと思っています。学ぶために聴いてはいけないですが、今までグリーフケアの研修を受けたり本を読んだりしてきた中で、実感を持っているんなことを知ることができるのは、生の遺族の声なんですよね。

個別性についても、本に「グリーフには個別性がある」と書いてあっても実感としてはなかなか感じられない。でもやっぱり同じお子さんを亡くしたお母さんであっても、こんなに感じ方が違うんだとか、こんなに反応が違うんだってことをリアルに出会って知ることによって「ああ、個別性ってあるんだな」と腑に落ちてわかる。

### 僧侶のための連続講座

——連続講座についてうかがえますか。

打てば響くお坊さんたちと出会ってこられたので、私にとってはそれが何よりも良かったですね。最初に連続の講座をお寺で開催したのは2009年から10年にかけてのことで、その時は、石川県の小松市のお寺さんたちが数ヶ寺合同で実行委員会を組んで、地元の遺族の人や地元の葬儀屋さんと一緒に頑張って勉強する場をつくろうということで始めました。

全5回の「グリーフサポート連続講座」で、そこから学び終えた後に、ふたつのグリーフケアの団体が産み落とされました。もちろん、今も定期的に場を開き、活動が続いています。そういう風に学ぶだけではなくて、実際に地域にグリーフケアの場をつくらうというお坊さんと坊主さんたちと出会って来られたので、そうした可能性を信じていきたいと思いました。いくら研修会で何百人というお坊さんに講演でお話できたとしても、その中で動いて、実際に遺族のサポートの場までつくれる人というのはごくわずかです。1時間だけ話を聞いて、そこまですぐには本当に難しいことで、できたらいいけど、すぐにはできなくていいとも思っています。まず知るところからはじめていく。もちろん、具体的にケアやサポートがそれぞれの地域に生まれにくいことには遺族は孤立したまま、困難を抱え続けるかもしれません。だから最終的には実際のサポートや助けとなるものを地域につくっていくように、お坊さんが学べる場を築いたのが去年名古屋で開講した「僧侶のため

のグリーフケア連続講座」というものでした。「お寺の未来」さんと協働し、未来の住職塾の卒業生たちがぜひやりたいと手を挙げてくれました。住職塾生以外にも数名参加があり、20名の定員はいっぱい。実際に修了生のいくつのお寺は遺族会との協働を模索しています。

### ロールプレイでの気づき

——そうした中で、自分のグリーフに向き合っていないということへの気づきもあるわけですね。そうですね。自分自身の中にもグリーフや喪失体験による傷つきがあったんだと気づく学びがあります。これまでにそうした痛みについて人に話したことがないという声も多く聞きました。このことは僧侶たちにとって大きいことだと思えます。苦しみを経験したことがあっても、それを誰かに話す経験がないから、誰かに受けとめてもらうとか、それこそそのまま受け取ってもらって、大事にされるといことがないんだらうなど。お坊さんに対する「こうあるべき」というイメージがすごくあるんですね。立派でなくてはいけない、弱さなど見せてはいけないと。

強くなきゃいけない、泣いちゃいけないってみんな思っている。でも連続講座に来て、やっぱりこみ上げてくる思いがそれぞれにある、それをないうことにせずに、人に伝えるということがどういうことなのか。人に伝えるってこんなに難しいんだと知らない、檀家さんが打ち明け

てくれた苦しみや告白してくれたことの重大さ、大変さがわからないですよ。だから自分自身と向き合うことを連続講座では大事にしている、連続講座は全部で五講なんですが、第一講が基礎知識で、第二講には人をケアする前に「自身を知る」セルフケアの学びをプログラムに取り入れているんですね。

第三講では、遺族役と僧侶役と観察者という役で3人1組でロールプレイをします。実際に場面設定をして、息子さんをいじめ自殺で亡くしたお母さんがいて、学校に怒りを持って、「あの子はどこに行ったの?」と問われた時に、何と答えるかというやりとりをします。そういうやりとりの中で、お坊さんが安易に「ああ、お気持ちわかります」と言った時に遺族がどれだけ傷つくのが、遺族役をやって初めてわかった。遺族はそんなに簡単にわかれたくない。でも、お坊さんはわかりますって言ってしまふことがある。だから、お坊さんだったらみんな遺族役をやったらいと行っていて、別に実際に自分が遺族になるという経験をしなくてもロールプレイをやるだけで十分に感じるわけです。どれだけわかってもらいたいのか、わかってもらえないのがどれだけ苦しいのかわかる。

### 沈黙し、待つ

「聴く力」を養うというプログラムがありますが、講義などはまだ聞かずに、まずロールプレイをやるんですね。それから講義を挟んで、もう一

度ロールプレイを行う。そうすると、皆さんの声のボリュームや話す量の前後の変化がよくわかります。講座をして、「話を聴くときは待つ必要もあります。沈黙の力を持つということ」と。そして、「沈黙というのは、相手にとっては思いをめぐらして、考えたり感じたりする時間なので、尊いものなんです」と言うと、その後半のロールプレイはトーンダウンして静かになるんですね。ボリュームが全然違ってくる。お坊さんが待てるようになるわけです。「何かしゃべらなきゃいけない」というプレッシャーからちょっと解放されて、待つということを知る、待つってつらいんですけど、でもやっぱり待たないと本当に感じていることは出て来ないので。——それはすごく大きな変化ですね。

この連続講座を受けて「今までだったら日々の法務の中でお説教っぽいことを言っていたんですが、意識して大事に話を聴けるようになりまして」という報告もありました。まず待つって聞けるようになったって。

### お寺に人が戻る

——それが継続できることが大切ですね。そうですね。お坊さんはカウンセラーではないので、ただ聴くことだけでなく、もちろん説くことも大事なひとつの手段なんです。でも、説く時に、相手に響くかどうかをちゃんと見なければいけない。それこそ個別性に対応しなければいけないと思うんです。病院の現場で活躍さ

れてきた大河内大博氏が「法話モードとケアモードのギアチェンジ」という表現をされていて、なるほどなと思いました。きっと相手の必要に合わせて、その時その時でギアを丁寧に切り替えられるようになるとういのでしょね。

——そういうことをやり始めると、お寺に人が戻ってくるということもありそうですね。

来ると思います。実際戻ってくるどころか、これまで縁のなかった人と新たなつながりが生まれると、それが増えているんです。身内の方を亡くされた直後のご遺族に「僧侶で信頼できる人はいませんか」と尋ねられて、まだ私とそこの人の信頼関係もそんなにない中でしたが、その方の地域にたまたま僧侶の知人がいたので紹介したところ、関係性がどんどんできていって「法事をお願いして、大変お世話になりました。有り難うございます」と。その後もずっと関係が続いています。ただその方は40代くらいなので、檀家さんのコミュニティに行ったら、自分よりもはるかに年配の方がかりで飛び交う言葉も「専門用語ばかりですこし疲れました」とおっしゃっていました。お坊さんとの関係はできるだけ、檀家さんのコミュニティが開かれてないけど、お寺全体のコミュニティとはつながれないんだということが勉強になりました。でも、この人の話を聞いていて、現代言われている寺離れとは真逆の、お寺に人が戻ってくるというか、新しくつながり直せるんだなど可能性を知りましたね。



インタビュー2  
押尾章治

建築家

# 〈みんなが集まるお寺〉をつくる

みんなら事業部プロデューサーのもと、

建築家の押尾章治氏が設計を手がけたお寺の施設が4件竣工した。

みんなら事業の運営理念のもとで、それぞれの施設がどのようなコンセプトで

設計されたのか、お寺との計画・設計時のやり取りも交えて紹介する。

## みんなら事業部について

——みんならプロデューサーで押尾さんが設計を手がけた納骨堂などが4件ほど実現していますが、まずはみんなら事業部について説明してください。

みんなら みんならというのは、名前のごとく、みんなが集まるお寺をつくることを目的としています。

そのためには、お寺に集まって来た人たちに、自分が今あることのかげがえのなさや人と一緒にいることのありがたさみたいなものを気軽に感じて楽しんでもらえることが必要です。そんなことができれば、お寺やお墓の環境だって当然良くなっていくはずだし、さらにその先に、前向きで素敵な共同体などもつくれるかもしれない。みんならとは、お墓とかお寺事業を媒介に、人が集まって一緒に盛り上げていける場所をつくる仕組みだと考えています。当然そうした人の集まる楽しい祈りの場所づく

りには、かなり緻密な施設計画やデザインが必要になってくるわけです。でも以前は、設計士さんなどに私たちが考えるイメージがなかなか伝わらなかった。「誰かに繋がるような雰囲気」とか、あるいは「見えない世界に通じ、祈りを感じることでできる空間」とか、宗教的な感覚の言葉が共有できても、それをデザインに置き換えられる人って意外といなかった。ほとんどの設計士さんは技術的な話や予算の話ばかりだった。なかなか難しいと感じていたところに、押尾さんと出会ったのです。

## 宗教建築の設計

——押尾さんは、建築家としてこれまで住宅や商業施設、美術館などさまざまな種類の建築を手がけられています。具体的な実現例の話の前に、宗教の世界で設計をするようになったきっかけや、お寺の設計について考えられていることなどをお話いただけますか。

押尾 美術館や展示空間のデザインの仕事などでは、展示物の見せ方に一番心を砕きます。どんなに小さな美術品でも、必ずより大きな世界観（たとえば作者の思想や思考、その時代との関係など）を孕んでいるからです。それらも一緒に、鑑賞者に対して短時間で分かりやすく伝えられることが大切なのだとも思っていました。

そうしたらある時目の前に仏像がやってきた。その信仰の形の美しさに触れると、これはやはり鑑賞の対象というよりは礼拝対象だなど思っただけです。それからですね、鑑賞と礼拝の客観的な違いについて思いを巡らせるようになったのは、いずれにしろ、仏様の持つとても大きな世界観を伝えなければならぬのは同じわけですが。

直接のきっかけは、以前手がけた「ひかりのギャラリー」と「対話のギャラリー」というふたつの礼拝空間のデザインでした。そこは礼拝堂で



「ひかりのギャラリー」：白い門型のフレームの光の連続が、中央の「出山の釈迦像」へとつながる。

ありながら、仏師でもあった開祖様の作品（仏像）を鑑賞できるスペースでもあった。加えて、写真や現代美術の展示も鑑賞できる「誰に対しても開かれたスペースをつくる」という企画でもあった。つまり仏像に対する礼拝と美術品としての鑑賞という異なる世界をひとつに融合するということ、少し特殊なデザインテーマだったのです。この時の経験から、自分の礼拝空間に対する思いがどんどん広がりましたね。

宗教という、信仰の伝播する仕組みは大きく分けてふたつあると思います。ひとつは教理や教典など、言葉として伝えていく部分。形が伴わない部分。もうひとつは、仏像や礼拝空間（お寺や教会）など、物理的な形を持ったモノの部分。この両方がある。

後者の仏像や空間があったいのには、つくられて何百年も経っているものであっても、そこに行けばつねに、仏様とその時点で向き合う生の体験が成り立つこと。これは何百年経とうがかわらない。（その分、形を残すということが本来にとても責任重大なことなのだと感じます）礼拝行為を、空間やモノの体験を通してより大きな世界を想像させる行為だとするとらえてみると、建築と宗教の世界はそれほど乖離しておらず、むしろ一体とすることが本来的であると考えるようになりました。



「対話のギャラリー」：天井から吊られたガラスケースが浮かぶ。仏像の展示は床座で鑑賞。ガラスケースは移動可能で仏像の種類によりレイアウトが変えられる。



来迎寺納骨堂（福岡県豊前市）。お寺前の田園風景と里山を背景に佇む。ライトアップされて佇むさま。外壁は砂模様吹付け

## 豊前市・来迎寺の納骨堂

——次に実現した建築についてうかがいたいのですが、九州でも納骨堂をつくられていますね。みんてら この来迎寺というお寺は福岡県の豊前市にあります。九州は、古くから納骨堂の慣習があり、墓石よりも納骨堂が選ばれる下地があった。特に昭和40〜50年代は納骨堂ブームで、こぞってコンクリートでつくられました。それらも老朽化していつぱいになった。そして時代も変わり人々の感覚やとりまく状況がいろいろと変化する中で、従来の独特な納骨堂建築だけではさまざまなニーズに対応できなくなりました。そんな中で、この地方にあるお寺としては画期的なデザインの提案をしたものが受け入れられて実現したものです。

押尾 みんてらプロジェクトに関わり、お寺を見て回る機会が結構増えて思っているのですが、木造の何百年というお寺から都会のビル型のものまで、どんなお寺にも共通しているのは、必ず金銀の天蓋や羅網などの絢爛豪華な装飾、色鮮やかな五色幕や〇〇、または竜の水飲みや蓮の花の銅製のギミックなどがあることです。当たり前前の話かもしれませんが、そうしたお寺特有の設えは、いにしへの庶民からしてみたら、この世の物とは思えない華やかさや祝祭感があつたのではないのでしょうか。ある意味そうしたものにも触れたくて、みんなお寺に行った。日常には有り得ない異質さというものが、信仰のきつかけとしてはとても有効だったのでは

う。それでこのお寺でも、周囲の山里の自然環境に対して、少し浮き立つような非日常感を挿入したら人の意識が集められるのではないかと考えたのです。そうしたときにモダンなエッジの効いた造形がちょうどよい異質さをつくり出すのではないかと思いました。

——逆に都市部でつくるならこのデザインはなわけですね。

押尾 そうですね。田舎の暮らしやお寺が、じっくり馴染む自然環境にあるからこそですね。だから対比的にモダンなデザインが、環境から離れて独自に浮き立とうとする力を出せるんです。

——この夜景の写真はとも変わって見えますね。この斜めに突き出した庇と袖壁の部分が、照明の効果と関係しているのですか。

押尾 この斜めの部分は、内部の光を放射状に外に広げていく導光板のような役割です。観音像が背負っている光背と同じで、光の広がり方を表しています。でも同時に、この庇と袖壁があることの効果で、背景の山に光の漏れが映し出されずに、正面からの光のみで立ち現れているような佇まいとなる。ちょうど舞台の書割りのような感じで、虚構のような雰囲気も出てきますね。

みんてら この来迎寺さんで一番感じたのは、お寺の可能性ですね。住職は、たぶん、この場所に対して異質なものという印象を最初はもたれて、実はこのデザインには少し引き気味でした。でもやり取りをしていく中で、どんどん可

能性を感じ始めてくれたのです。これをきつかけに何か変わるかもしれない、これからのお寺としては、檀家だけではない、もう一步先に行くにはこういう部分で変えていかなければならないのかなど…。

——檀家だけではないというのは？

みんてら 小さな町なので、檀家の数は決まっています、かつ、過疎化で減る一方なんです。そうなる、豊前というところよりもっと範囲を広げていくためには、勇気を持って殻を破らなければいけません。ちよつとどうしようかと迷われたけれども、でも破つてしまえと。

もだんだん乗ってきてくれて、最終的にはこの景色を見た時に、後ろの里山とお寺とこの納骨堂とが繋がったというのを感じられたのかなと思います。

——環境と新たな繋がりをもつと同時に、納骨堂ということで過去と繋がり、かつ、未来へ繋がっていくための施設でもあるんですね。

みんてら この施設を1年以上待っていた人たちには安心していただきました。自分のことだけじゃなくて、過去のご先祖さんと自分とそしてまたその先に繋がったという安心感ですね。

### 寺子屋の施設計画

押尾 こちらはお寺の位置から少し離れた新興住宅地の一角につくる施設の計画です。公民館的な寺子屋というか、お寺が積極的に地域活動



道路側から見る。向かって左側がロードサイドのカフェ、右奥が礼拝堂。

サイクロイド曲線による屋根の反りが特徴的

押尾 日本のお寺の屋根の反りは、このような曲率で作られることが多いです。サイクロイド曲線というのですが、もはやこの曲線はお寺の屋根のカーブだと認識されていますね。今回はそうした伝統的なデザイン要素を取り入れ、新興住宅地内であっても、どこでもお寺が運営する施設という雰囲気をつくらうと思えました。

みんてら 住職さんは建物に対しても慎重な方が多くて、従来の寺院建築の形を超え過ぎてしまつていくことなくついでに「そこまではうちではできません」と。そういうところで古来の建築様式を思わせるものが入ってくると安心するんですね。

押尾 さらに今回は、その曲線の組み合わせでつくった屋根の軸線の向きを、少し離れたお寺の本堂がある方向に向けてとりました。建物本体の向きはそのまま、屋根の軸線のみずらさず感じて。こうすることで遠くに離れているお寺とも一対の関係ができる。このずれた屋根の由来を説明するだけで、みなさん大変喜んでくれますね。連続する垂木の反りなども、見る人によつて伝統的に見えたりモダンに見えたりと、面白さを感じてくれるようです。

みんてら この施設は最初に住職さんのテーマという強い思いがありました。ひとつは学ぶの場所ということ、人と人が繋がる場所ということ。あと、楽しくないといけない。こうした大きい思いがあったんです。

や文化、伝承などを担つていこうとしている施設ですね。

計画としては、地域の人が集まれるカフェと礼拝のできる広間を中心に、地域振興のために使う倉庫や住職の住居などがあり、他にもお庭を地域に貸し出すことなどを予定しています。これは本当に新しいお寺のあり方で、ある意味、みんてららの考えにとっても近い施設だと思います。

——住宅地の中にある寺子屋として、屋根のデザインが特徴的に見えますね。



俯瞰カット。屋根の軸線が斜めに指し示す方向にお寺の本堂がある

押尾 地元の演劇や絵画などのサークル活動を、お寺施設がサポートしてつながりをもつことで、地域との関係を見直そうとしているんですね。近隣の大学の、テニスサークルの合宿所の役目などもする。こうした地域の振興に関わる機能的なスペースに、礼拝の対象である仏様がいらっしゃるというのがとても新鮮だと思います。最近の公共的な施設にはないですが、お寺とは、本来はそういう場所だったのではないのでしょうか。特に震災以降、改めてそうした役割が見直されて

いるようにも思えます。

——リクエストにあった「楽しい」というのは、具体的にはどういうことでしょうか。

みんてら 地域のNPOがここで何か活動するとか、老人クラブの方が皆さんに何かを披露し提供するなどで、自分も楽しむし観る人も楽しめるというような活動も想定したお寺の施設ということ、従来からすると、お寺じゃないようなお寺なんですね。運営そのものはこういうことになってくると、お寺独自ではできないんです。

——カフェが入る時点で、もう難しいですよ。みんてら そうすると、地域の人たちとも共同運営というモデルをつくっていかなきやいけない。それが前提での計画ですね。

——お寺の機能が拡張していくわけですね。

押尾 そうですね。お寺が一方的に何かを施すとかではなく、地域の皆さんに運営にも参加してもらって、都合よくお寺を活用して楽しんでもらう。そうしたお寺と地域が経済的にも社会的にも補完関係になるような運営が成り立って初めて、地域とその信仰の核になるお寺が、本来的な共同体のような纏まりを形成できるのだと思います。

——施設だけでなく、実際の運営、そして地域とのかかわり方という点でも完成するのが楽しみです。

押尾 従来の信仰のためだけの場所として人々を集めていたお寺空間は、今、もつと多面的に

社会と関わっていくお寺空間へと変わってきていますよね。従来のままだと人は集まらない。そうした社会の変化に添えていく上では、まずデザインや計画的な視点という従来のお寺にはなかった建築的な手法で見直し、それを地域や社会と連動した運営の中に当て嵌めていくのが有効です。もちろんすべては仏様の存在を中心しながら。そうして現代の社会との距離を縮めることで、地域に根差した賑わいのあるお寺空間が再生されるのだと思っています。

※誌面で紹介した作品の詳細について、また、これまでの竣工作品について知りたい方は、みんてら事業部までお問い合わせください（お問い合わせ先☎電話 048-25412222 メール info@mintera.jp URL <http://www.mintera.jp>）。



押尾章治  
1964年千葉県生まれ。建築家。明治学院大学法学部卒業。隈研吾建築都市設計事務所統括設計室長などを経て、一級建築士事務所UAを共同設立。様々なタイプの住宅作品や商業施設、礼拝施設や展示施設などを手がける。2009年、「ひかりのギャラリー」「対話のギャラリー」で、Faith & Form(米)IFRAA International Awards(礼拝空間部門)

インタビュー3  
茂木高次

行政書士

# 葬儀やお墓をケアする安心のシステム

これからますます高齢化が進み、身寄りのないおひとりさまも増える中で葬儀やお墓、財産相続などについて心配を抱える人が増えてきている。

そこで、そのあたりをケアするシステムを構築している一般社団法人全国相続支援協会の茂木高次代表理事にお話をうかがい、システムをつくった背景とサービス内容、さらに、これからのお寺との連携などについて語っていただいた。

みんなら みんなら事業部では、みんなが集まるお寺をめざして、まずは、かつてお寺がやっていたことをもう一度呼び起こそうというようなことを考えています。かつては各家庭にお坊さんが棚経に行ったり、話し相手になったりということもあったし、あるいは檀信徒さんがお寺に顔を出して安否が分かっていたけれども、今はそういう関係がなくなりつつある。

そういう中で一般社団法人全国相続支援協会の活動では、以前お寺がやっていた、人が亡くなる前後のケアに近い部分をちゃんとシステム化した形でやられている。それだったら、わたしたちがお寺の窓口となって、協会と連携してそのケアの部分を一緒にすることができないかなと思っただけですね。

実は、このようなことを考えるようになったきっかけがありました。みんなら事業部は永代供養墓や納骨堂を手がけるにあたって、まず

檀家さんや希望者を対象に計画説明会をやります。ある時、お寺で説明会をしたときに、あるお年寄りから質問をいただいたんですね。永代供養墓も理解したし、値段についてもわかった。ただ、もうひとつ、自分は一人身で天涯孤独なので、葬儀のお金も払ってしまいたいから、葬儀価格も教えてくれないかと。われわれも仕事も、まさかそんな質問があるとは思っていません。さらにはこの方は、住職と契約をしても自分が死んだりぼけてしまったらお寺と契約している誰もわからないんじゃないかということもおっしゃった。このお話はまさに協会のサービスと結びついていく部分ですね。

おひとりさまの最後をケアする

茂木 われわれの一般社団法人全国相続支援協会は、設立が今から4年ほど前で、設立当初は、

亡くなった後の手続き、つまり、相続手続きや、遺産をどうやって分割するとかといったことから中心でした。設立から1年くらいたってから、だんだん、終活という言葉がはやってきて、そうした中で問題になったのは、今お話のあったような「おひとりさま」なんです。

おひとりさまにもいろんな方がいて、結婚をせずにそのまま高齢者になった方もいれば、旦那さんが亡くなって奥さん一人で住んでいるという方もいらっしゃる。また、子どもがいても疎遠で付き合いがないとか、いろんな方がいらっしゃるんですが、そういった方が、さきほどの方と同じで、ご自分の最期が心配だと。自分の葬儀は誰がやるのか、埋葬はどこのお寺でどのように行われるのかとか、財産は誰が継承するのか、そういったさまざまなことが心配になると。そういったおひとりさまの相談が3年くらい前から



茂木高次（もてきたかじ）1956年長野県生まれ。行政書士。一般社団法人全国相続支援協会理事長。

増えてきて今に至っているという状況です。具体例でひとつお話をさせていただと、当時50歳代で、小児麻痺で動けず障害者施設に入っていた方から依頼を受けました。わたしがその施設の近くの会館で相続セミナーをやったときに、施設の方がたまたまそのセミナーを聴いていて、実はこういう人がいるというところからご相談があった。

この方は実家が秋田なんですけど、相続する人がいないということでした。お父さんも亡くなっているし、ご兄弟も亡くなられている。それで、この方が亡くなった時に、その財産をどうするのかということが施設としてもけっこう心配だった部分があって、なんとか亡くなる前にちゃんと取り決めておきたいということでした。

それで、遺言を書いたんですね。お父さんとお兄さんのお墓も秋田にあって、自分もそのお墓に入りたいという希望があったんですが、秋田のお墓は直系の長男しか入れないんです。お寺の住職さんとの間で永代供養ならできますよという話があったようなので、そういう話を元に遺言を進めました。

財産のほうは、その方のご希望は自分が亡くなったらユニセフに寄付したいということでした。すると、亡くなった時にその方のお骨を持つていつて永代供養するということが、預金としてあるお金を解約してユニセフに寄付するということをしないといけないわけですね。これを誰がやるかといった時に、遺言の中で遺言執行者というのを指定するわけですが、それをわたし

が執行者として指定されたわけなんです。5年後ぐらいにその方が亡くなったので、その遺言にもとづいてお骨を秋田のお寺までもつていつて預金はユニセフに寄付いたしました。遺言というのは単独の意思表示なので、こうしてほしいということは何でも書くことができます。わたしがその方のかわりに住職と電話で話をして永代供養を100万円という金額にしておいたので、お骨と一緒にその100万円もわたしがついていったんですが、これはやはり最期の自分の気持ちで遺言ということで用意しておいたのでそのようにできたんですね。

——何もないと周りが困ってしまいますね。

茂木 困ってしまうんですね。ちゃんとした法

的な仕組みの中でできたということで、施設の方からは喜ばれて、これからもそういう方が増えるからまたお願いしたいというようなことも言われました。

ちなみにこの場合に、遺言がなければ相続人がいないのでお金は国に没収ということになります。でも遺言があったことによって、その方の意思が確実に達成されたということですね。

### 遺言と死後事務委任契約について

——協会のサービスについて、うかがっています。たいんですが、遺言書の作成を支援するというのをやられています。遺言がないというのは問題の発生するものとすよね。

茂木 冒頭のお話のように、永代供養墓でも葬儀でも、契約をしてお金を預けても、亡くなった時に誰がその契約についてわかっているのかという心配があります。これは2つのあり方で達成できると思います。ひとつは遺言で、もうひとつは死後事務委任契約というものです。

遺言書というのは、一方的な意思表示で、死後事務委任契約は契約なので相手がいるという大きな違いがあります。後者の方は、Aさんという人と契約をして、自分が亡くなったならその人に葬儀をしてもらう。葬儀から埋葬、さらには葬儀の時の電話連絡とかもありますね。

やはり、契約を結んでおくと安心で、仮に自分がぼけてしまったとしても、契約ですから相手方の人はやらないといけない。葬儀やお墓につ

いて、誰かが遂行してくれるよというのを確約できるシステムなんですね。

遺言の場合は、Bさんという人に自分のことをやってほしいということを遺言で指定する。でも、遺言というのは効力があるのは、お金を誰にどうやって分配するかという部分だけで、契約ではないので、亡くなったら海洋散骨してくれと書いても法的な強制力がないので、誰もやらない可能性があるし、自分の骨を〇〇寺に埋葬してくれと書いても、それはあくまでも希望であって、もしかしたら誰もやらないかもしれない。

——遺言にはそこまでの強制力がないと。

茂木 ないんです。強制力があるのはお金の分配についてだけなので。しかし、遺言執行者を指定しておけば希望通りになる可能性は高いということになります。

——協会ではその2つのサポートで、亡くなった後のことがスムーズに行えるように手助けをされるわけですね。

茂木 そうですね。その人に適したスキームがあると思うんです。この人には遺言で十分というケースもあれば、死後事務委任契約のほうがいいというケースもあるので、それはその人とお話合いとか、周りの環境、状況とかを聞いたうえでのご提案になります。まずはそのコンサルテーションで、そのあとに遺言書を書いたりとか死後事務委任契約の契約書をつくったりということになると思うんですね。

### 相続にかかわる業務

——亡くなって相続が発生した時には、協会では実際にどういう業務をされるのでしょうか？

茂木 亡くなった後の相続の際のサービスというのは一番一般的な業務になっていますが、亡くなった方の財産を相続人に分配しないといけない。そこのお手伝いをするんですが、たとえば、お父さんが亡くなってお母さんと子どもが3人いるというケース。土地と建物と預金が2千万円あるといったときに、その土地建物を誰が相続してあとのお金を誰がもらうのかというのをその4人で話し合っていたらいいですね。その話し合いのところからサポートさせてもらったり、遺産分割協議書という形で取り決めなければいけないので、そのサポートと、あと実際、銀行で預金を解約したりとか、不動産の名義変更を司法書士さんを使ってしたりといったことをすべていたしますというサービスなんですね。

——相続人の間でもめないようにアドバイスもされるのでしょうか。

茂木 そうですね。一般的には、お父さんが亡くなられてお母さんと子どもが2人、3人というような家庭ではもめることは少ない。われわれの業務としていちばん多いのは、高齢の夫婦で旦那さんが亡くなってしかも子どもがいないような場合ですね。こうしたケースでは相続人は奥さんとご主人の兄弟姉妹になる。旦那さんが85歳だとすると、その兄弟は80歳とか90歳と

かで、昔は兄弟が多いから10人くらいのこともある。しかもその10人の中で亡くなっている人がいるとその人の子どもが相続人になります。兄弟が5人亡くなっていて子供が各2人いたら10人で、5人生きていたら計15人の相続人になるわけです。

こういうケースはざらにあつて、この15人と話し合いをして、土地建物は奥さんにあげますけどもいいですかと。預金については解約をして皆さんはこのくらいになりますよということをお提案させてもらって、それで皆さんが了承したら遺産分割協議書をつくってハンコを押してもらいますが、相続人が多いので実際はそこまですごく大変なんですね。

——もめるケースが多そうですね。

茂木 多いですね。この前も相続人が18人いて、一年半くらいかかってやっと終わったんですが、ちよつともめて弁護士さんにも出てもらいましたね。

もめないようにするためにいちばんいいのは遺言です。日本の相続制度というのはまず遺言ありきで、遺言がなければ皆さん話し合つて遺産分割協議しなさいという仕組みになっています。何でもめるかという遺言がないからなんですね。ところが、皆さん遺言は大事なものとわかつてはいるんですが、なかなか一歩を踏み出せずにつくるまでに時間がかかるといふか、なんとなく日々の生活に追われて後回し……ということになるので、本当にそう思つたらすぐ手を打つ



の方がいいと思いますね。

お金は信託会社に預ける

——死後事務委任契約の場合、契約がちゃんと履行されているかどうかをチェックするシステムというのはあるのでしょうか？

茂木 このスキームでいちばん問題になるところは、お金なんです。自分が亡くなったらどこそこの葬儀屋さんで100万円でこういう葬儀をしてほしいという人がいた場合に、そのお金をどうするかというと、葬儀屋さんに預けてもし葬儀さんが倒産したらパーになってしまう。お寺さんも、預かって困ってしまうというところで、お金の行き場がない。そこで、信託会社にお金を信託する。葬儀が終わったら信託会社は受任者の請求に基づいて葬儀代を支払うというスキームをつくるわけです。そういう時に信託会社のそうした行為をチェックする仕組みがあって、死後事務委任契約と信託契約に基づいてちゃんとやったかどうかをチェックしてもらいます。そういう仕組みになっています。

お寺との連携

——人間関係がさらにまた希薄になり、かつ、ますます社会の高齢化が進みその中でおひとりさまも増えていく。そういう状況では、こういうシステムというのが本当に必要なものとして社会的な要請としても当然出てきていますね。

茂木 だと思えますね。10年後には65歳以上の

高齢者が3割になると言われていますから。当然おひとりさまがそのうちの何割かいるので、こういう仕組みがしっかり根付いていかないと大混乱を起しますよな。

——そのあたり、お寺さんとの連携というところで、どういった展望をもたれていますか？

茂木 お寺では人が亡くなりますから、亡くなった後の手続きというのが当然あると思います。あとは、相続手続きで相続人が多くいらつしゃるケースとか。

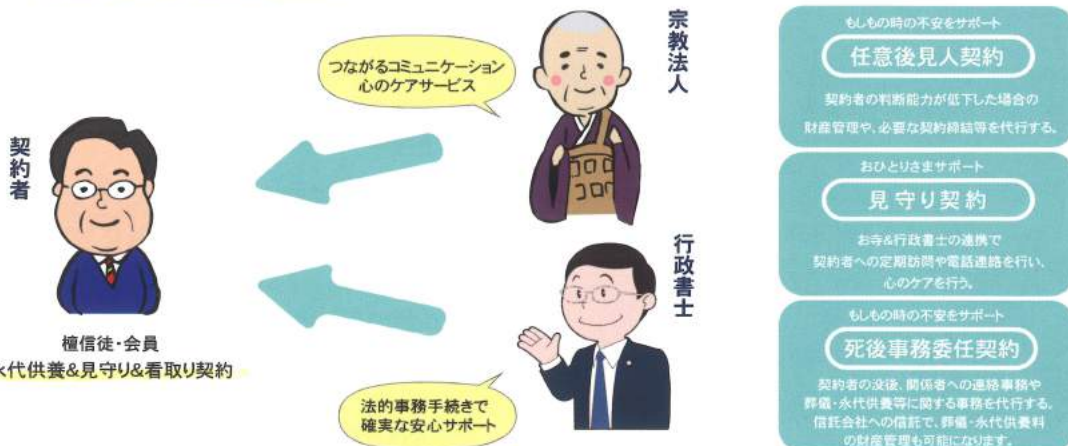
昔はそれだけだったと思うんですが、おひとりさまの最期は誰がどう見るのかといったケースが増えていくので、そのところでお寺さんと連携して、まずは檀家さんの中でそういったお悩み事のある方がいらつしゃればサポートをしていくということができないのではないかと思います。

お寺が元々地域に根差した存在だったにもかかわらず、だんだん地域から分離してしまつたのが、最近また地域のコミュニティの中心ということで評価されているという部分が出てきています。檀家さんもいなくなるし、葬儀、法要だけではこの後やっていけないということで、いろんなことをやられている住職さんがこのところ増えていますね。そうしたところで、こうした連携というのはお寺と一般の方々とのネットワークを再構築するきっかけにもなるのではないかと思いますね。

宗教法人×行政書士×みんてら

『かかりつけのお寺さん』永代供養墓システム

おひとりさま見守り&看取りねっと



良き人生の終焉を迎えるための終活マガジン



# 終活Cafe

## with 葬祭流儀

お買い求めは各エリアの書店、  
コンビニまたはWEBにて

Amazon ▶ <http://www.amazon.co.jp>

終活 cafe セレクトショップ ▶

<http://www.shu cafe.jp>



群馬 VOL.2  
(定価 1,008円)



埼玉 VOL.4  
(定価 1,010円)



千葉 2014-2015  
(定価 980円)



東京 VOL.4  
(定価 1,000円)



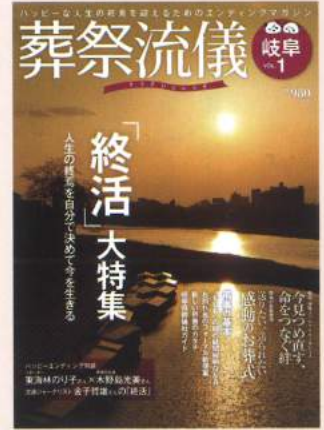
東京多摩 VOL.1  
(定価 1,008円)



神奈川 VOL.4  
(定価 1,010円)



長野 VOL.2  
(定価 1,010円)



岐阜 VOL.1  
(定価 1,008円)



名古屋・愛知 VOL.2  
(定価 1,010円)



大阪・兵庫・京都 VOL.2  
(定価 1,000円)

終活最新情報が満載 便利なサービスがいっぱいWEBサイト  
読者参加型のサービス続々新登場!

# 終活Cafe

<http://www.shu cafe.jp>

日本初の終活マガジン  
葬祭流儀が運営する  
終活ポータルサイト

終活カフェ

検索

株式会社日本メモリアル通信

本社：〒106-0032 東京都港区高輪 4-5-16-303

TEL & FAX 03-6409-6584

長野編集室：〒380-0831 長野県長野市東町 131

TEL026-237-2818 FAX026-237-2522

# お寺さまと 「地域のご高齢者サポート」を行っています

認知症になって、ひとり暮らしになって、介護施設に入れるの？  
介護施設でも、自分らしく楽しく老後をご過ごせるの？  
財産は、葬儀は、お墓はどうするの？

このような不安を感じていらっしゃるみなさまに、安心とやすらぎをお届けしているのが **パドマ・ビハール** です。

弁護士、税理士、ケアマネジャー、ライフプランナーなど、各ジャンルの専門家が、お寺さまと協力して、地域のご高齢者をサポートしています。

## 🏠 春日部ビハール 🏠

春日部ビハールはお寺とご縁のある方のために  
(株)パドマ・ビハールが運営している介護施設です。

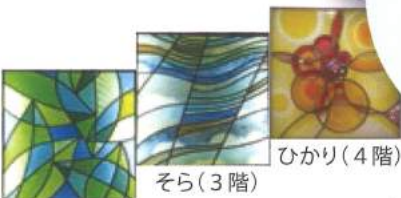
自立の方から要介護5の方、さらにターミナルケアの方までご入居していただける施設です。ゲストルームもありますので、ご家族の宿泊やお食事もしていただけます。また、お墓参りや温泉旅行もご協力させていただきますので、お気軽にご相談ください。



玄関ホール  
Entrance Hall



エレベーターホール  
リビングスペース  
Elevator Hall  
Living Space



みどり(2階)  
スタンドグラス  
Stained Glass

エレベーターホールには、  
それぞれのスタンドグラスが  
各階に趣を変えて作られています

### お問い合わせと見学のご案内

見学をご希望の方はあらかじめお電話ください。  
お待ちしております。(土・日・祝日も見学は可能です)

TEL: 0422-27-8011 (担当: 佐藤)  
(平日: 9時~18時まで受け付けております)

入居費用 156,000円~(税別)  
(入居費・食費・一般管理費を含みます)

介護度の高い方は、費用のご相談をさせていただきます。  
体験入居も可能です。お問い合わせください。

(株)パドマ・ビハール

〒344-0113  
埼玉県春日部市  
新宿新田335-1



63人の方にお住まいいただけます

天気がいい日は、  
富士山が見えます



居室スペース  
Private Room

# みんてら

これからのお寺を考える情報誌

第7号

発行：2015年11月

● 発行元

有限会社 川本商店

● 本社

〒107-0052

東京都港区赤坂 2-21-1

● みんてら事業部

有限会社川本商店 川口営業所

〒333-0844

埼玉県川口市上青木 1-7-4

電話 048-254-2222

FAX 048-254-0888

<http://www.mintera.jp>

[info@mintera.jp](mailto:info@mintera.jp)